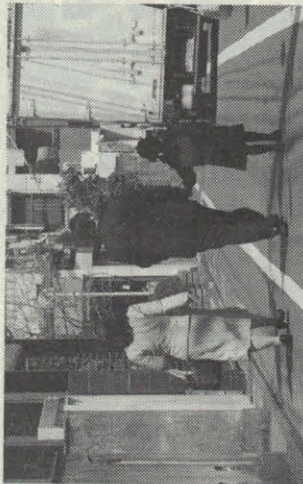


経営と暮らしのあらかると

災害対策

第10回 (最終回)

幸せは与えられるものではない



▲自分の大切な人を守るためにも、災害対策への意識をたえず持ち続けることが大事だ

オリンピックに関連する商機や、マイナンバー制度がもたらすさまざまな新ビジネスで世間が盛り上がる陰で、今なお各地では災害からの復興作業が続いています。最終回となる今回は、復興を通して経営・災害対策に共通する重要なことについてまとめます。

仮設住宅は 幸せのゴールか

オリンピック商機やマイナンバーが生み出す新ビジネスを世間が見据えるなか、各種災害の被災地が遠い過去のようにかすんで見える方々が少なくないのではないのでしょうか。

「復興」とはすなわち、災害に遭う前の幸せを取り戻す「復幸」に他なりません。そして復幸は、衣食住が足りればそれでよしということではありません。仮設住宅や代替地を与えられることで、与えられたものに満足

するよう諭されたとしても、半強制的な満足が幸せのゴールではないのです。

新たなビジネスチャンスばかり目を向けていては、復幸に向けて今もある方々に寄り添う心を失ってしまいがちです。災害対策でもっとも怖いことは、地震や噴火や風水害ではなく、人々の心の中に起こる無関心なのです。

災害対策も経営も 目的は一つ

幸せは与えられたものを盲信することではなく、自らの内側から湧き出る思いを相互に幸せになり合える形で築こうとするところに訪れます。

経営者のなかには、「災害対策は税金みたいなものだよ」とおっしゃる方がいますが、それは「やりたくないけど納税のように仕方なくやらざるを得ないもの」というニュアンスが強いように見受けられ、災害時代の経営として幸せに至るものからはほど遠い状況です。そのような考えのもとで行われる災害対策や経営では本人も周囲も幸せを手に入れることはできないでしょう。そのような対応・経営であれば、事業継続も事業継承もせず幕を閉じる方が良いのかもしれないとすら筆者には思えます。

何を変えて何を守るか

「復幸」も経営も災害対策も、

一度何かを行えば終わりではなく、この先何年も続いていく、続けていくものです。それぞれの社会状況や災害リスクに適應させて続けていくことで初めてしなやかな制度、状態となり、それから賢く幸せな発展が訪れると言えるでしょう。

その際に企業経営者として、また一人の人間として、何を變えて何を大切に守り続けるかが、各企業や社会や家庭に生きる役職員に問われる重要課題です。建物の耐震性が弱ければ耐震補強を、経営の屋台骨の「耐震性」が弱ければその補強や経営変革や事業承継を行うことが必要です。

災害の教訓を後世の社会に引き継ぐのと同様に、経営において創業の志や経営理念を次世代に引き継ぎ、改めるべきものは災禍を繰り返すことのないよう改め、経営において何をすれば、より良く全員が幸せになるような社会実現に貢献できるかを見つめ直すことが重要なのです。

無情にも場所と相手を選ばず起き得る災害においても、また、法制度・税制・社会状況が絶えず変わりゆくなかにおいても、道しるべとなる人や本などを頼りにしつつ、大切なものを見極め、また知恵を備えて生き抜くしなやかさを持つことによつて、ひとりでも多くの方が救われ幸せに至られますことを、陰ながらお祈り申し上げる次第です。

(おわり)



日本マネジメント総合研究所合同会社 理事長 戸村 智恵